

華岳山恩林寺発行



令和6年4月号

頸飽袋 742



写真：沢庵漬け



お寺へ行こう 和尚さんと友だちになろう

中山かんのん  華岳山 恩林寺

中山中学校下

☎506-0052 岐阜県高山市下岡本町2779

✉kagakuzan@onrinji.com ☎(0577)34-1245



<https://onrinji.com/>

沢庵禅師と柳生剣法

沢庵たくあん禅師という名前を聞いて思い起こされるのは沢庵漬け、大根の漬物ならだれでも知っている庶民の食べ物です。しかし

沢庵禅師とは

どんな和尚で

あったかはあまり

知られていません。



沢庵和尚は天正元年、但馬の国に生まれました。当時は戦国時代末期、織田・豊臣・徳川と天下人は次々と変わり新しい世界を求めて最も躍動した時代ともいえます。

その徳川の時代になりますと幕府は体制を確立するため、大名や寺社の統制を必要とし、禁中きんちゆう並

公家諸法度を制定。仏法を支配下

に収めるべく、高僧を集めてそのブ

レーンを作ることに注力します。

しかし沢庵はその権力に対峙し、

仏法の自立性、自主性を守り抜こ

うとします。天皇が幕府の了解を

得ずに、沢庵に紫衣着用を許可し

たこと。これを幕府が違法だとし

沢庵を流罪りゅうざいにしました。

沢庵は皇室の度重なる要請を受け

たにもかかわらず法嗣ほうし(跡継ぎ)を立てなかつたとを考えれば、沢庵自身、仏法を権力から引き離したいという切なる願いであったといえるでしょう。

流罪生活から四年目、二代將軍秀

忠公が亡くなり大赦たいしやが行われ江戸

へ帰ることとなります。江戸では彼

の人氣は一段と高まり凱旋將軍を

迎えるようであったといわれます。

しかし沢庵は何もなかつたかのように

堺の南宗寺に引きこもり、いつも

のように修業に余念がなかつた。

沢庵禅師と幕府の剣術指南、柳生

但馬守宗矩たじまのかみむねのりは同じ但馬の出身で

昔からの懇意にしていた間柄。しかし寛永十一年、但馬守らが無理やり三代將軍家光公に会わせました。家光は仏法修業そのものにしか関心を示さない沢庵に大いに惚れ込みました。老中らに命じて特別な地位を与え、十分な待遇をしようとした。しかし沢庵はいずれも断り、静かに修業の日々を過ごすことを望みます。沢庵にしてみれば天下の將軍であつても所詮、仏法から見れば世事にあくせくする一人の男としか映らなかつたのかもしれない。沢庵が柳生但馬守に与えたとされる『不動智神妙録』は

ふじうちしんみょうろく

劍の極意書として後々まで伝えられておりますが、友である但馬守に対し沢庵の姿勢そのものを、練り返し力説しているのは、自分が自分になりきる。自分に徹しきるにはどうすべきか。ということであり政治家として兵法家として、また一人の親としてどうあるべきかを親切丁寧に解説しております。殊に千手観音の具体例を挙げます。千の手が自由に使えるその機能を十分に發揮するためには、一つの手にこだわることなく千の手に残りなく心が通い、千の手を隙



なく支配するところまでいかないといけないと。少し難しくなりましたが、道を極めるには自分のことを知り尽くし、相手のことを知り尽くすことが大切。部下が多い場合は隅から隅まで自身を見なければいけないし、部下一人一人を知らないといけない。そうすれば、上手く部下を使うことが出来る。それを伝えた親切書と言えます。こうして沢庵和尚は自身の道をしっかりとあるき続け、自分になりきる方法を伝え続けたのでした。



住職合掌

小僧さんの



【第三章 一節】 僧堂の朝

まだ夜が明けきららない薄暗い時
間に、板を叩く音が聞こえます。

境内各所に設置された多くの
巡照板じゆんしょうばんと呼ばれる板を叩き多く
の僧侶に時間を知らせます。



その板に
書かれた
謹白大衆きんぱくだいしゆん
生死事大せんすうだい 無常迅速むじやんしゆん 各宜醒覚こいぎしんきよ
慎勿放逸しんぶふあんいと叫ぶ声が響き渡り、
それを合図に寺院内が皆一斉に
起き出します。

謹んで修行僧の皆さんに申し上
げます。生と死は大切な事。その
時の移り変わりはあつという間に
過ぎていく。それを自覚して無為
に過ぎさぬ様にといい偈文です。

巡照と呼ばれる、早起きをし境
内を駆け回つて起こす、まるで日
直のようなお役目があります。

しかし私たち同夏どうげは助け合おう
と、一緒に起きるようになろう
と決めました。しかし実際には朝
に強い2人と弱い2人という姿に

落ち着いていくことに。
その結果、早起きを得意とする
私とその多くを起こす事となり

ました。本堂の掃除・朝課(お勤
め)を終えると坐禅の始まり。
今朝も無事に起こし終えたとい
う安心感からか、その大切な坐
禅中に、私がウトウトする事も。

朝寝坊した方が目立つはずす
が、多めの警策を有り難く頂く
私の方が目立ちました。

坐禅後、同夏に「ごめんな、いつも
起こしてくれてありがとう。」
その言葉だけで私は救われていた
のだと思います。



華岳山 恩林寺

住職 古田 正彦
新堂 小森 鳳雅